自分の進む道

【あらまし】

身近な人の死が、人の人生を変えることがある。山田さんは十七歳の時、大好きだった先輩の交通事故死を経験した。人が死ぬことなど考えたことがなかった彼女。小さい頃からの看護師になるという夢が、自分の本当の夢なのかと疑問を持ち始めた。十七歳という多感な時に、具体的な人の死を経験することで、人生の見方を大きく変えて行ったというストーリー。

●小見出し

裕福な家庭で育って
小さい頃の夢―「安定」がすべて
先輩の交通事故死
自分の夢を考えて―「安定」と「願望」のはざまで
私の夢
現実の中で流されて
私自身の人生を生きたい

裕福な家庭で育って

私はわりと裕福な家庭で育った。両親が共働きのため、何度もさみしい思いもしたが、その分、何不自由なく買い与えられ、やりたいことも全てやらせてもらえた。毎月家族旅行にいったり、冬には毎週のようにスキーに行ったりと、私たち家族はとても幸せに過ごしていた。そのたびに母は、「こんなに不自由なく暮らせるのは、二人とも定職に就いていて、お金があるからだよ。お母さんがパートだったら、こんな生活は無理だよ」と言っていた。

私の母は貧しい家に生まれた。母は欲しいものを自由に買ってもらえなかったし、お金がなくて大学さえ行かせてもらえなかった。そのため、母は小さい頃から、私たち姉妹にお金の大切さを教えていた。お金がなかったら何も買えないし、どこにも行けない。いざという時に困る。母の意見はもっともだと思い、私はいつの間にかどうしたら安定した収入を得られるかを考えるようになっていた。

小さい頃の夢―「安定」がすべて

小学校低学年の時、学校でよく将来の夢について聞かれた。私はいつも、「看護師」と答えていた。別に看護師に憧れていたわけでもないし、なりたかったわけでもない。ただ、女性でも定年まで働け、安定した収入が得られると思っていたからだ。今思うと、他にも選択肢はあったが、十年も生きていない私は、これが最善の仕事だと思っていた。特に、夢とかやりたいことがなかった私は、将来について考えることが面倒に感じ、将来について聞かれた時は、つねに、「看護師になる」と断言していた。

その言葉に両親も喜んでいた。その言葉は高校生になっても言っていた。理由は、「他に将来なりたいものがないから」、「安定しているから」だった。ただそれだけだった。

高校になると進路相談など将来について話す機会がたくさんあったが、「私は将来看護師になる」と断言していたため、他人と比べ、悩むことはなかった。両親も先生も、そして、私までも、「私は看護大学または、看護の専門学校に行く」と思っていた。将来を考えると私は、「それでいい、それが一番正しい道だ」と思っていた。

先輩の交通事故死

高校二年生の春、私に衝撃を与えた出来事があった。それは大好きな先輩の死だった。彼は野球部に属していたため、春の地区予選に向けて、遅くまで練習していた。そんな先輩の姿を野球部のグラウンドの隣にあるテニスコートで見ていた。先輩の彼女は私が所属していたテニス部ということもあり、休憩中や練習が終わった時によく話していた。私の高校の野球部はそんなに強くはなかったが、甲子園に行くことをめざし、日々頑張っていた。その先輩にとって甲子園に行くラストチャンス。先輩の甲子園に対する思いはものすごく熱かった。甲子園の話をする先輩の笑顔が大好きだった。

六月の初め、その日は梅雨にもかかわらず晴天だった。野球部は遅くまで練習していた。私たちテニス部は野球部より早く切り上げ帰宅した。夕飯後テレビを観ていた時、携帯がなった。

「先輩が事故ったって！　車にひかれたみたい！」

私は思わず身震いした。そして、すかさず返信をした。

「どうして？　大丈夫なの？」

その返信は、「分からない」と、それだけだった。他の友達にメールをしても詳細を知る人はおらず、野球部員にメールをしても返信は来なかった。もちろん、その先輩にメールをしても返信はなかった。その夜は不安と、「誰かから無事メールがくる」という期待が入り混じって、眠れなかった。

翌朝、メールが届いた。「新聞に先輩のことが載っている」。びっくりして先輩の記事をさがすとその蘭には、「男子高校生が死亡」と書かれていた。そして、学校に行くと全校集会が行われ、先輩の死をはっきりと知らされた。学校では先輩について話す者はいなかった。みんな涙をこらえて授業を受けていた。

先輩の葬儀には先生、クラスメイト、野球部しか出席できないと聞かされていたが、先輩の彼女と数名のテニス部員と授業をさぼり、葬儀に出席した。その時やっと先輩の死を実感した。頭が真っ白になり、何も考えられなくなった。

自分の夢を考えて―「安定」と「願望」のはざまで

学校に行っても涙は止まらなかった。「なぜ先輩なのか？　まだ十七年しか生きていないのに」。子どもの時からの夢の甲子園の地区予選の直前で亡くなるなんて、口惜しくて仕方がなかった。地区予選にも出られない先輩の無念さを思うとやるせなかった。学校全体が先輩の死で沈んでいるようだったが、野球部の練習の声だけが響き渡っていた。彼らは先輩の死にもかかわらず、葬儀の日の放課後から練習を始めていた。「甲子園に行くため」、「先輩とともに夢を叶えるため」だった。

私はそんな部員の姿を見て、葬儀の喪主であった先輩のお父さんの挨拶を思い出した。「息子の分まで、夢を追い続けてほしい」。野球部は夢に向かって頑張っていた。私はその時、「私の夢って何だろう？」と考え始めた。それは今まで考えてこなかった問題。私の夢は看護師になることではないことはすぐわかった。「私も先輩のように最後まで自分の夢に向かって頑張りたい」と思い始めた。

私の夢

私には誰にも言ってなかったが、興味があることがあった。それは海外だ。小学三年生の時、家族旅行で初めて海外に行った。それはすごい刺激を私に与えた。英語なん知らない私には、日本語が通じないことも、日本人と全く異なる人がいることも、全てが衝撃だった。それから何度か家族で海外旅行に行ったり、高校一年生の時、アメリカで2週間のホームステイをしたりするたびに、海外に対する思いが強くなっていった。日本ではない世

界に魅力を感じた。それは言語にもであり、文化、社会、そこに住む人々、全てが好きだった。

しかし、興味はあるものの、将来の夢につながることはなかった。大学に行って英語を学びたいと思ったことがないわけではない。しかし、英語を学んだところで、直接将来につながるわけではない。私が一番考えたのは「安定」だった。大学に行っても将来自分のなりたい職に就けるわけでもないし、もしかしたら職に就けないかもしれない。OLになって結婚退職するかもしれない。それでは、定年まで働くことも安定した収入を得ることもできない。

こんな話をしていると、「どれだけお金に対して貪欲なんだよ！」と思われるかもしれないが、何不自由なく育てられた私は、自分の子どもに対しても何不自由なく育ってほしかったのだ。やりたいことを我慢させるような親にはなりたくなくて、「安定」を求めていた。

海外に興味があっても、看護師として働いたら何度でも海外旅行に行くことができるし、子どもにも行かせてあげることができる。それに、看護師をめざす私を両親は応援してくれている。だから、私はどこかで看護大学または専門学校に行くことに納得していた。

しかし先輩の死を目の当たりにして、自分の将来や人生について考えるようになった。私の人生は親を喜ばせるためにあるわけでも、将来生まれてくる子どもを不自由にさせないためにあるわけでもない。自分のためにあるのだ。もちろん、家族を不幸にしてはいけない。でも、私はどこかで家族を理由に自分の夢や、やりたいことから逃げてきた。敗れるのが怖いから。挫折するのが怖いから。それはそれで幸せなのかもしれないと今までは納得していたが、「自分でやりたいことを我慢するのはもったいない」と思い始めた。やれずに亡くなった人を知っているから。

先輩の死をきっかけに、私は逃げるのを止める決意をした。自分のために生きる決意をした。死はいつ訪れるかわからない。家庭を持つ前に訪れるかもしれない。「だったら、自分のために精一杯人生を楽しもう」と思った。

現実の中で流されて

そう決意したものの、とても怖かった。やりたいことをやるということは、今まで十七年間生きて築き上げてきた人生設計を崩すということだった。看護師の道をあきらめると将来が見えなくなる。将来が見えないことはとても怖かった。そのために進路を変更することを決断できずにいた。やりたいという気持ちは強くても、自分の人生を左右すると思うと簡単にはできなかった。

いつも最初に頭をよぎることは、「安定」だった。この「安定」は、その時の私にとって最優先事項だった。だから、「安定」と「願望」の中で揺れ動いていた。そんな私は親や先生にすら相談することができなかった。今まで看護師になることを応援してくれた親

に、突然、看護師にならないと言ったら悲しむかもしれないと思うと、打ち明けることはできなかった。そして、母は「安定」を選ぶと思っていた。

先輩の死から、将来の道を迷ったまま、時間だけが過ぎて行った。いつの間にか、私は受験生になっていた。周りは受験ムードの中、私はなかなか真の受験生にはなれなかった。そして、あっと言う間に、先輩の一周忌が訪れた。一年前と同じように、じめじめした梅雨がやってきた。その時、私は我に返った。一年がこんなに早く感じたことは今までなかった。私が悩んでいる間、同い年の野球部員は今年も甲子園に向けて一生懸命練習していた。周りのクラスメイトも志望校に合格するために一生懸命勉強していた。先輩の彼女も先輩が志望していた大学への入学をめざし、先輩の死と闘いながら頑張っていた。

しかし、私は何もしていなかった。ただ悲しんでいた。ただ悩んでいた。その一年をものすごく無駄にした気がした。一人だけ置いてきぼりにされた気分だった。周りの子は今を懸命に生きている気がした。「私も今を生きよう！ だから、前を向いて進み続けなければいけない」と思った。人はいつ自分の人生が終わりを迎えるか分からない。だから、その時後悔しないように日々務めなければならない。一日一日を大切に生きようと決めた。

私自身の人生を生きたい

私は先輩の一周忌を機に変わった。まず、親や先生に将来について相談した。看護師の道を諦め、英語系の学部に入りたいと。先生は、「あと半年しかないから止めといた方がいい」と進路変更することに反対したが、親はあっさりと賛成してくれた。「まだ若いんだし、やりたいことに挑戦しなさい」と私の意見を尊重してくれた。親も反対すると思っていたので、とてもびっくりした。

そんな親を裏切らないように、勉強に励んだ。看護の専門学校に入学したかった私は、生物と数学しか勉強してこなかった。英語は論外だった。久しく単語帳なんて見てないし、学校の成績も下から数えた方が早かった。残りセンター試験まで七か月を切った状況では、難しいと何度も言われた。でも必死に英語や日本史を中心に勉強した。私は暗記が苦手なので、挫折しそうになったことも多くあった。しかし、そのたびに、この受験競争に参加することすらできなかった先輩のことを思い出した。すると、今生きていることに感謝し、頑張れることができた。

そして、私は今の大学に合格することができた。私はこの道を選んだことを後悔したことは一度もない。私は今まで親の生き方がすべてのように考えていた。また、誰かのために生きることで自分の存在意義を感じていた。しかし、大学に来て、いろいろな人と出会い、いろんなことを経験するたびに、人生の多様性を実感した。視野がものすごく広がった。そして、私は、小さい時のようには、母が求めていた「安定」した道が正しい道だと思わなくなった。

と言うよりも、人生に正しい道などないことに気づいた。正しいか、正しくないかを決めるのは、自分だからだ。だから、私はどんなことでもやりたいと思ったら果敢に挑戦しようと思う。自分が楽しめない、納得しない人生ほどつまらないものはない。これからもやりたいこと、新しいことに挑戦し続けて、人生を終える時に自分自身に納得できるような人生を歩みたいと思う。

高校野球シーズンが始まると、いつも先輩を思い出す。この先もずっと思い出すだろう。そして、そのたびに、私には不思議な力がわき、頑張れる。大好きだった先輩の死を経験したことによって、私は自分から逃げることを止め、前より強くなれた。これからも、高校野球が開催される限り、私は、常に、前を向いて生きていけるだろう。